

高校生の進路意識の理解と対応に関する研究

キャリア・カウンセリングの理論をとおして

高知県立高知農業高等学校 教諭 近森 公夫

今までの高等学校の進路指導を振り返るとき、どこに進学もしくは就職するかという指導に偏重し、「生きること」や「働くこと」への関心が希薄であったのではないかと思う。生徒が社会人・職業人として基礎的・基本的な資質を身に付けるための取組や、自らの生き方を探求し、主体的に進路を選択決定できるようにするための取組である「キャリア教育」が今こそ必要だと考えられる。

本研究では、キャリア教育の中核をなす「キャリア・カウンセリング」の理論と手法を用いて生徒の進路意識を理解するとともに、その有効性について検証し、これからの生徒たちへのかかわり方や支援の在り方について研究した。

キーワード：キャリア・カウンセリング、キャリア教育、進路指導、コーチング、出口指導

1 はじめに

(1) キャリア教育の中核を担うキャリア・カウンセリング

個別の指導・援助を適切に行うことを重視する「キャリア教育」において、キャリア・カウンセリングは極めて重要だと位置づけられている。しかしながら、リクルート調査で「キャリア・カウンセリングできる者はいない」という学校が65%に及び、多くが進路指導主事である回答者の84%が「キャリア・カウンセリングの技法を研修や講座で学んだことが無い」という結果がある。学んだ経験があっても、「1回の受講で即現場での実行には至ってない」「現実として一人ひとりに対して十分な相談時間が確保できていない」というような声も聞かれる。「キャリア教育あってカウンセリングなし」では、個々の生徒にとって、望ましいキャリア形成意欲は培われるものではない。

キャリア教育とともに、脚光を浴びることの多いキャリア・カウンセリングであるが、その業務内容や手法についてはまだまだ未知の部分があるように思われる。埼玉県職業能力開発センターでキャリア・カウンセラーとして活躍されていた小島貴子先生は、キャリア・カウンセリングとは「やりたいこと、働きたいことを見つけられず、迷い悩む生徒達から、その解決策を生徒自身から引き出し、導き出す手伝いである」とし、示唆を与えてくれている。こうした支援こそが従来の進路指導において手薄になっていた部分であると考えられる。

(2) 昨年度の研究から

昨年、様々な研究の中で、キャリア教育について学習し、その必要性を強く感じた。従来の進路指導（出口指導偏重や職業との条件マッチングのみによる企業選択など）からキャリアの形成意欲を育む進路指導に重点を置かなければならないということである。しかしそれ以上に、個々の生徒の内面にもっと近づき、生徒達の意識を理解し、幼い頃より育んできた資質や夢、価値観を大切にしながら、職業生活への移行を支援するような相談を行う必要がある。将来への不安感が渦巻く生徒の声に耳を傾け、生徒たちにとって必要なキャリア・カウンセリングの理論と手法を研究したいと考えた。

2 研究目的

キャリア・カウンセラーの資質を持った教師が、生徒の持っている能力や興味・関心、特性を最大限に引き出しながら適切な進路情報を提供するなど、職業生活への移行を適切に支援することができ

れば、生徒は自信をもって自己実現が果たせる進路の選択・決定ができるだろう。

3 研究内容

(1) 基礎研究

高知県内の公立高校生の進路状況（平成 16 年度卒業生：就対協調査）

平成 16 年度の卒業生（平成 17 年 3 月卒業）の就職内定率は 82.8%と 4 年ぶりに 80%台に回復した。この結果は県外企業の景気回復が好調なことや、就職担当教師及び就職アドバイザーの熱心な企業訪問、教育委員会と労働関係諸機関との協力等によるものと考えられる。

しかしながら、一方で就職未決定のまま卒業した 267 人(4.5%)と進路未決定(進学浪人含む)のまま卒業した 577 人(9.6%)の存在があり、生徒にとって厳しい状況であることに変わりはない。この数は卒業生全体の

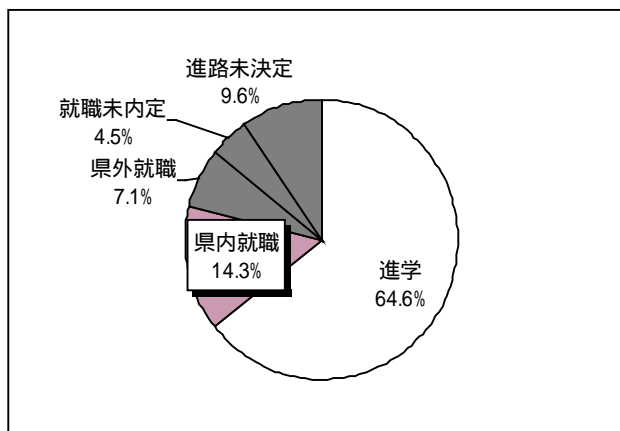


図 1 県内公立高校卒業生の進路状況

1 割を超えており、いわゆるフリーター・ニート問題につながる恐れがあると考えられる。

高等学校の教師として、高校在学中に十分な指導ができていたのかと疑問が残る。同時にこのような生徒が増加する傾向を鑑みると、従来の進路指導の在り方を見直す必要があるのではないかと考える。

全国の中学校、高校、短大、大学の卒業生の進路状況（平成 16 年度卒業生：学校基本調査）

表 1 は昨年の 3 月に全国の中学校、高校、短大、大学を卒業した生徒・学生の統計である。

表 1 全国の中・高・短・大の卒業生の状況調査

全国的に見ても、本県と似た現状を示している。全校種の卒業生約 310 万人のうち、8.2%の約 25 万人が学校を卒業していながら、進学も就職もしていない状況にあることがわかる。高校では 8.5%の約 10 万人である。

	全卒業生	就職も進学もしなかった生徒の割合	実数
中学校	1,236,363人	1.2%	14,836人
高校	1,202,738人	8.5%	102,233人
短大	104,621人	19.6%	20,506人
大学	551,016人	21.3%	117,366人
合計	8,094,738人	8.2%	253,769人

短大、大学と進むとますますその割合は大きくなっている現状があり、大きな問題であると考えられる。

進路をめぐる現状と課題

県内の高校 3 年生を対象に行われた夏のスキルアップ講習会の講師は、「高校生活で一番印象に残っていること」や「得意なこと、自慢できること」、「最近楽しかったこと」、「長所」を問うた時に、「特にないです」、「分からないです」と答える高校生に対して、次のようなイメージを持ったようだ。

「山に登っているが、深い霧がかかっている。だから山頂が見えず、何メートルの山に登っているのかわからない。今いる地点がどこかわからないし、あと何メートルでたどり着くのかもわからない。深い霧の中、自分の立っている場所、あるいは自分自身すらもよく見えなくなってきている」と。

また、現在の高校生は、平成元年生まれ。今までで最も求人が多かったのは平成 3 年で、物心付いた時は平成不況にあった。大人は夢を無くし、将来を描けず、子どもたちに対しても職業生

活に対する明るい話題を提供できないままだった。一方で子どもたちは、少子化の影響もあり、多くのことを与えられ、自分で考え、自分で行動することができなくなっている。

それにもかかわらず、社会に出る前になって、その子供たちに対して、「進路を自分で決めなさい」「将来を描きなさい」と言われても、戸惑うということには納得できる。進路を決定できない、将来に希望を持ってないなどの進路指導上における生徒の抱える課題は、生徒の問題だけではないと考えるべきである。

自分の進路を決定できない生徒や、就職しても早期に離職してしまうなど、若年者の進路に関する諸課題の原因を学校教育の立場から考えてみると、出口指導偏重になっていたことが一要因ではないかと考えられる。これまでの学校教育や進路指導では、「生きること」や「働くこと」にあまり重点を置かないで来た傾向があったのではないかという事実を認めざるを得ないのではないだろうか。

キャリア教育

現在の高等学校の進路指導にかかる課題を解決すると考えられる教育として、キャリア教育があげられる。

ア キャリア教育とは

「キャリア」や「キャリア教育」については、様々な解釈がなされている。平成16年1月に出された「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議の報告書」(以下報告書)では、「キャリア」を「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」としている。同時に「キャリア教育」を端的に「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」としている。すなわち、生徒が社会人・職業人として基礎的・基本的な資質を身に付けるための取組や、自らの生き方を探求し、主体的に進路を選択決定できるようにするための取組である。

報告書では、表2のように枠組みを例示している。これらの4つの領域、8つの能力の育成を目指した取組がなされていれば、キャリア教育のおおよその目的は達成されていると言える。

キャリア教育というと、目新しい教育のように思われがちであるが、これまでも学校教育の中で展開されてきたことでもあり、負担に感じる必要もない。

これまでの教育活動をキャリアの視点で見直した教育であると言え、新しい学習プログラムを作るのではなく、これまでの全ての取組を効果的・効率的に組み替え、置き直していくものであ

表2 職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み

領域	領域説明	能力説明
人間関係形成能力	他者の個性を尊重し、自己の個性を發揮しながら、様々な人々とコミュニケーションを図り、協力・共同してものごとに取り組む。	「自他の理解能力」 自己理解を深め、他者の多様な個性を理解し、互いに認め合うことを大切にして行動していく能力
		「コミュニケーション能力」 多様な集団・組織の中で、コミュニケーションや豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく能力
情報活用能力	学ぶこと・働くことの意義や役割及びその多様性を理解し、幅広く情報を活用して、自己の進路や生き方の選択に生かす。	「情報収集・探索能力」 進路や職業等に関する様々な情報を収集・探索するとともに、必要な情報を選択・活用し、自己の進路や生き方を考えていく能力
		「職業理解能力」 様々な体験等を通して、学校で学ぶことと社会・職業生活との関連や、今しなければならぬことなどを理解していく能力
将来設計能力	夢や希望を持って将来の生き方や生活を考え、社会の現実を踏まえながら、前向きに自己の将来を設計する。	「役割把握・認識能力」 生活・仕事上の多様な役割や意義及びその関連等を理解し、自己の果たすべき役割等についての認識を深めていく能力
		「計画実行能力」 目標とすべき将来の生き方や進路を考え、それを実現するための進路計画を立て、実際の選択行動等で実行していく能力。
意志決定能力	自らの意志と責任でより良い選択・決定を行うとともに、その過程での課題や葛藤に積極的に取り組み克服する。	「選択能力」 様々な選択肢について比較検討したり、葛藤を克服したりして、主体的に判断し、自らにふさわしい選択・決定を行っていく能力
		「問題解決能力」 意志決定に伴う責任を受け入れ、選択結果に適應するとともに、希望する進路の実現に向け、自ら課題を設定してその解決に取り組む能力。

ると言える。

イ 進路指導との違い

キャリア教育と進路指導の定義・概念では、両者の間に大きな違いは見られず、むしろ進路指導の取組は、キャリア教育の中核をなすといえることができる。端的に言えば、これまでの進路指導が進路先との適合が中心であったのに対し、キャリア教育はより幅広く進路先(社会)への適応を目指した取組であると言える。

キャリア・カウンセリング

キャリア・カウンセリングは生徒一人ひとりを支援する姿勢が求められるキャリア教育の中核をなしていると同時に、キャリア教育とは車の両輪のように推進される必要があるとも言える。生きることや働くこと、自己の在り方に関する取組を行えば、必要に応じてカウンセリングを行い、生徒が抱いた感情・価値観を承認し、生徒に客観的な評価として返す。一方で教師はそれを記録として残していくという取組が必要である。

ア キャリア・カウンセリングとは

一般的にキャリア・カウンセリングの目的は、生徒や学生、社会人が当面している進路選択や問題解決を支援する直接的な役割を担い、問題解決能力の育成や、自己実現に向けての自己指導力の発達を伸長させることにあると言われている。

イ 進路相談との違い

これまでの進路相談が、どちらかという卒業年次における進学、就職といった進路決定に重点が置かれ、進路先への適合指導的な相談になっていたと言える。

キャリア・カウンセリングは卒業時における進学や就職のために実施するのではなく、在学3年間にわたるキャリア教育の一環として行われる教育活動でなければならない。そのためにも、図2で示したキャリア・プランニング・プロセスに沿った相談活動を展開することが望ましいと考える。

私自身の反省になるが、進路相談の場面では、進路について生徒に「聞きたいこと」を評価を加えながら聞いたり、これまでの経験などを「話したいこと」を話したりして、教師による教師のためのカウンセリングになっていた。また曖昧だった生徒の考えを掘り下げ、その思い

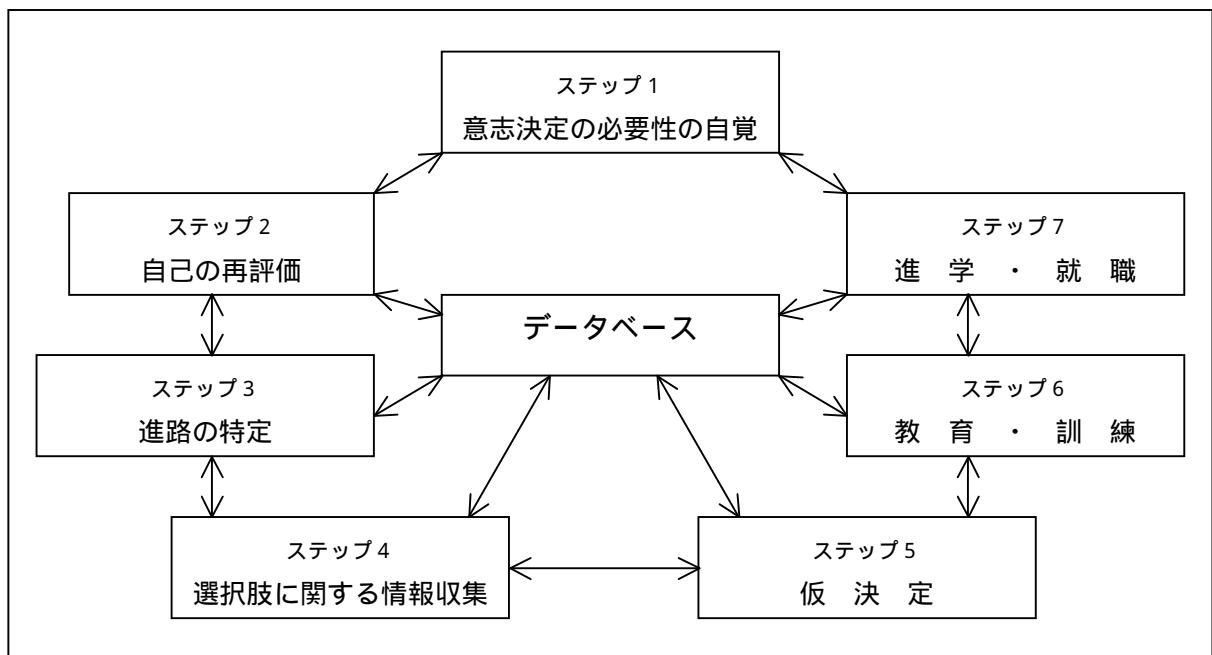


図2 キャリア・プランニング・プロセス

を具体化できていなかった、という反省もあげられる。これらの反省点を克服するような相談活動がキャリア・カウンセリングだと位置づける。

(2) 実践研究

キャリア・カウンセリングの理論と手法を用いて生徒の進路意識を探り、対応方法を見いだすため、またキャリア・カウンセリングの有効性を検証するために、高知農業高校に御協力をいただき、キャリア・カウンセリングをさせていただいた。

平成 17 年 9 月 16 日から
12 月 16 日までの間で 30 日、
進路室の生徒閲覧室にて、
昼休みと放課後に 3 年生を
中心に実施させてもらった。

表 3 支援内容

話を聴く	就職斡旋支援	面接応答の支援	履歴書作成支援
33回(24人)	4回(4人)	16回(13人)	7回(7人)

表 3 は実施した支援内容である。

4 まとめ

(1) 研究の成果

進路意識の傾向

ア 不安を抱える生徒

卒業を前にし、進路の選択・決定に対しての問題意識は様々ではあるが、一様に生徒たちは不安を抱えている。特に就職希望者は、希望する職種の求人があるのか、職業社会はどんなところなのか、と不安に思っている。また、就職試験解禁日の 9 月 16 日以降、受験先を決めきれず、あてども無く求人票をパラパラと探している姿を多数見かけた。出遅れた感のある生徒たちに共通しているのは、進路先をすぐ決めてしまう生徒と比較して、強い不安感があることである。

イ 自己理解不足の生徒

履歴書の志望動機欄に書く内容や面接で応える内容について、困っている生徒に多数出会った。自己の興味・関心がどこにあるのか、また長所は何なのかなど、自己の掘り起こしが十分にできてなく、自己理解の浅い生徒が多いと感じた。

関連して、自己の特性(長所)を受験しようとする職種の特性に結びつけることができていると感じた。個人にも特性があるように職業にも特性がある。生徒個人に職業の特性にあった強みを持っているにもかかわらず、それを志望動機として表現できていない場合が多かった。

ウ 情報収集不足の生徒

受験先決定の際の企業研究は、求人票の記載内容のみに頼る生徒がほとんどであった。受験する企業について、どんな企業か、また何を調べたかを問うと、求人票を見て、「何かを作る会社みたい」、「パンフレットを見た」と返ってくる。また、選択してから決定までの期間も 1 週間以内と短く、進路という大事な選択にもかかわらず、感覚的、衝動的とさえ言える。

エ 根拠の無い県内就職希望

就職希望者が求人票一覧を閲覧する際は、県内外を確認し、次に職種で、職種が希望に添えば給料というチェック順の生徒が多い。県内外の選択について県外志望の生徒の多くは、「一度は県外に出てみたい」、「将来の夢を叶えるための職業が県内には無い」、「県内には求人が少ないから」、「親の薦め」と話してくれた。そしてそのほとんどの生徒が、「将来は高知に帰ってきたい」という考えを持っている。県内志望の理由は、「親元の方が楽」、「特に理由はない」、「一人暮らしに自信が無い」といったことで、「高校卒業後、県内で働く必要がある」という理由の生徒はいなかった。

オ 全体をとおして

近年、よく言われるような「人間関係をうまく築くことができない」、「自分で意志決定でき

ない」、「自己肯定感を持ってない」、「将来に希望を持つことができない、進路を選ぼうとしない」、などの側面も一部では見られた。

しかし、一方で働くことや生きることに対する生徒たちの関心や意欲は低下しておらず、潜在的な資質・能力が高いことも明らかになった。

キャリア・カウンセリングの有効性

ア アセスメント（自己理解用）の有効性

生徒は具体的な進路は決定していなくても、将来どのような生き方をしたいのか、またどのような働き方をしたいのか、といったキャリアの種を持っていた。最初は「やりたいことが無い、見つからない」と主張する生徒であっても、様々な働き方や職業への考え方を記した多数のカードの中から、自分にあったカードを選ぶ（カードソート）という作業を一緒に行うと、その生徒独自の勤労観・職業観が存在することがわかる。

また、小学校・中学校時代を振り返り、その満足度の高低を時系列に沿って波によって表すワークシートは、その時の感情を振り返りながら行うと、当時の成功体験や満足感が思い出されると同時に、自分を見つめ直すことができ、前向きになることができたようである。

キャリア・カウンセリングに、自己理解用のための各種ワークシートとともに職業適性検査を実施すると、その生徒に適した進路の方向性がより鮮明に見えてくるものと考えられる。

イ 話を聞くことの重要性

進路に対する不安が大きく進路を決めかねている生徒は、こちらが声をかけて始めた相談であっても、話を聴いてもらえただけで満足し、2度3度と足を運んでくれた。

生徒は、それだけ不安な状態にあり、進路についての不安な気持ちを聴いてもらいたがっているのである。例えば進路が決定したとしても、教員がその思いに応えることができなければ、生徒は不安のまま、そして自己有用感を得ないまま、卒業を迎えることになる。

ウ 共感、承認の重要性

キャリア・カウンセリングによって、自分が今まで気づかなかった考えや興味・関心が明らかになり、自分が認められると「方向性が見え始めた」と不安は解消され、より前向きな態度になれるのである。ただ過去の自分や現在の感情に沿った話をするだけで、大きく前進できるのである。このことから、「答えは生徒自身が持っている」ということが分かる。

最初は、「何をしたいか」「何もしたくない」と言っていた生徒が、キャリア・カウンセリングを受け、終了後には「楽しかった」「新たな自分に気づいた」など、好意的な評価を得ることができた。その中で最も有効性を感じたのは、「クラスみんなにも教えてあげたい」という感想であった。

カウンセリングの中で、これまでの経験やその時の感情などを聴きだしていくと、そこにはしっかりとしたその生徒独自の興味や関心、強みが見えてくる。自信が無かったり、客観的な評価ができていなかったりしたためである。それを履歴書や面接に反映させることができれば、その生徒独自のものになり、企業からの「その生徒の個性を知りたい」に応えるものになる。

キャリア・カウンセリングのポイント

ア 教師の価値観や判断を介入させない

これまでの進路相談では、教師自身の価値観や判断、これまでの経験を口に出すことが多かったと反省する。生徒は未熟で、正しい道へと指導しなければという思いがあったのである。日常の教育活動の姿勢が「正答」を述べることを求められているのもその要因の一つであるかもしれない。しかし、これでは指示的カウンセリングであり、生徒が自ら考え、選択していくキャリア・カウンセリングにはならない。生徒の主張が非現実的・非論理的であっても、「間違っていると思うけど・・・」と言うのではなく、自分自身で無理なこと、難しいことを気づかせる相談活動でなければならない。

多くの方は、人に指示されたことに対しては、積極的に行動できない。自分で考えて決めたことは前向きに行動することができる。キャリア・カウンセリングは自ら考えられるように、そして選択できるように支援することが目的である。

「あれほど指導したのに」という教師の言葉がよく聞かれるが、その指導は生徒自身の意に添ったものでなかったことが原因であることが多い。

イ 言葉にならない気持ちを言葉に換える

何らかの迷いや悩みを抱えている生徒にとって、進路選択・決定にあたって最初からその悩みや迷いの核となるものを明確に言葉であらわすことは難しい。そのため、沈黙が起きたり、返ってくる言葉が抽象的で理解しにくかったりすることが多々ある。しかし、ここで教師が生徒の思いを代弁し、決めつけて結論を急いではカウンセリングにならない。その抽象的、不安定性、不明確性に寄り添うことが重要である。生徒は何を伝えたいのか、どういう気持ちなのかを生徒全体に注意を払いながら、聴くことが肝要である。

キャリア・カウンセラーの位置づけ

クラス担任でも教科担任でもない、生徒に対して評価しない立場の私にだからこそ話せることも多くあったようだ。生徒の内面に潜む感情を汲み取り、そこからその生徒に見合った進路実現のためには、予算的な問題もあり、実現は難しいかも知れないが、そうした立場の教員を各学校に配置することが望まれると感じた。

ただ、学校におけるキャリア・カウンセラーは今の制度では、明確な位置づけがなされていない。今後、位置づけられることがあれば、以下のことに留意しなければならない。

学校全体の教育相談活動の先頭に立つと、多くの相談がキャリア・カウンセラーに集中してしまい、相談活動機能を低下させる恐れがあるので、先頭に立たないということに留意しなければならない。日常、生徒により多く接している担任や部活動顧問の先生が中心でなければ、キャリア・カウンセラー 1 人での対応も物理的に不可能である。

したがって、日常生徒に接し、観察している教師が相談の中核になれるような環境（基盤）を作っていくことが重要な役割になる。そのためには日頃から、さまざまな情報を生徒のみならず、教師にも提供していく事が大事になる。

望ましいコミュニケーションの在り方

キャリア・カウンセリングは同じ教育相談であっても、治療的教育相談、予防的教育相談とは異なり、開発的教育相談であると言える。その点で言えば、「相手の自発的な行動を促進するコミュニケーション技術」であるコーチングと相通じるものがある。ただし、コーチングは目標を持っていない人に対しては効果が無いと言われる。そのため、キャリア・カウンセリングによって目標を明確化し、コーチングによって目標達成に向けた日々の行動を主体的に取れるような日々のコミュニケーションや支援、関わりが望まれる。

この姿勢こそ、個々に焦点を当て個々のキャリアの形成を促進しようとするキャリア教育の目標に合致する生徒との関わり方であると考ええる。

(2) 今後の課題

小・中学校との連携

キャリア教育は高等学校だけで行われるものではなく、小学校段階から発達課題に応じて進めなければならないが、校種間に壁があるのか、現段階では連携ができていないように見受けられる。まずは、地域の小・中学校が、どのようなキャリア教育を行っているかを把握し、情報交換をしい、どのような子ども達を育てたいのかを議論し、継続的・体系的なキャリアの形成支援を行うべきである。

また、児童生徒理解のための方法として、校種間でキャリア・カルテ、あるいはキャリアパスポートのようなものを引き継ぎ、同時に生徒にもそれを持たせるということも有効だと考える。

キャリア・カウンセリングの普及

正式にキャリア・カウンセリングを申し込んでくる生徒がいなかったのは、「キャリア」や「カウンセリング」という言葉が理解しにくく、拒絶感を抱かせたようだ。

また、現在の高校生は幼い頃より、与えられることに慣れており、このようなサービスについても、自らが進んで受けに行くという意識は薄い。それだけに、こちらからの積極的なアクションや受けたいと思わせる動機付けが必要である。

生徒たちがこれから体験する社会は、ますます「キャリア」ということを意識しなければならない社会である。「キャリア」や「キャリア・カウンセリング」という言葉に慣れさせておく、意識させる機会も必要である。なぜなら、長い職業人生を歩む中で、一人では解決しきれない課題に直面することがある。その時に、自分らしい選択・決定ができるようにするためでもある。

これらを行わずに卒業していくと、次に同じこと（進学者が就職する、離職後再就職するなど）が起きたときに、自己の興味や能力、適性の掘り起こしができなく、立ち止まってしまうことが予想される。高校生の段階から自己理解を深めるキャリア・カウンセリングの体験をしておくことは重要なことである。

5 最後に

「答えは自分の中にある」。キャリア・カウンセラー養成講座やコーチングセミナーでもよく出てきた言葉であるが、今回の研究の中での実践で、それを確認できた。今までの私は、「生徒は未熟であり、教師はより良い方向へ導いてやらなければならない」と考えていた。その導く方向というのは、まさしく教師である私にとってのより良い道であって、生徒にとって良い道であったかは定かではない。今思えば、かなり独りよがりになっていたと反省する。

生徒は自身のキャリア目標について漠然とはしているが、確かに自分の中に持っている。しかしそれは自信が無く、不安なものであり、また非常に不確定なものである。それだけに他からの影響を受けやすく、流されやすい。受け身の状態にならざるを得ない状態にある。そこへ教師が過去の経験・価値観から指導し、生徒は自信がないので、それに従う。まさしく、教師に作られたキャリアである。

生徒との間に信頼関係を築き、不明確・不安定なキャリア目標を明確なものにし、自らのキャリアを自ら計画を立てられるように支援するのが、キャリア・カウンセリングである。他人によって描かれたキャリアを歩んでいくと、次にキャリア転換の必要性に迫られた時に立ち止まってしまう可能性がある。今はそんな状態に置かれやすい、極めて先行き不透明な世の中なのであることを認識しなければならない。

引用・参考文献

- | |
|---|
| キャリアカウンセリング入門 渡辺三枝子+E.L.ハー ナカニシヤ出版 2001.9 |
| プロカウンセラーの聞く技術 東山紘久 創元社 2000.9 |
| 論理療法による3分間セラピー M.R.エデルシュタイン D.R.スティーブル著 誠信書房 2005.2 |
| 就職がこわい 香山リカ 講談社 2004.2 |
| キャリア教育論 - 進路指導からキャリア教育へ - 吉田辰雄 文憲堂 2005.3 |
| 子どもがニートになったら 玄田有史 小杉礼子 生活人新書 2005.7 |
| キャリアカウンセリング 宮城まり子 駿河台出版社 2002.4 |
| 心を動かすリーダーシップ 鈴木善幸 日本実業出版社 2003.9 |
| 生きがいの創造 飯田史彦 PHP 研究所 1999.9 |
| 進路情報テキスト(キャリアガイダンス)リクルート |